

平成 26 年度第 3 回浜松創造都市推進会議 議事録

日 時：平成 26 年 10 月 22 日（水）午後 3 時 00 分～午後 4 時 5 分

場 所：浜松市役所本館 5 階 庁議室

出席者：根本敏行会長、寺田賢次副会長、和久田明弘委員、杵屋英夫委員、楢森隆一委員、安形秀幸委員、梅野敏夫監事、川嶋朗夫監事
（オブザーバー）

影山伸枝創造都市推進担当課長、石塚良明国際課長、森田孔二文化政策課長、村上広幸産業振興課長補佐（瀧下且元産業振興課長の代理）、加藤智春観光交流課長補佐（石川淳観光交流課長の代理）

報道関係：2 人

傍聴者：2 人

事務局：影山伸枝担当課長、影山元紀副主幹、宮木広由、辻昌孝、外山裕太、藤谷佳澄（以上、企画課創造都市推進グループ）
鈴木三男文化政策課長補佐

1 開会

（事務局 影山元紀）

本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。ただ今から、第 3 回浜松市創造都市推進会議をはじめさせていただきます。本日は、過半数を超える全員の委員にご参加いただいておりますので、会議が成立していることを報告させていただきます。

なお、委員交代がありましたので紹介いたします。浜松市文化振興財団の役員交代に伴い、齋藤委員に代わり和久田明弘常務理事に委員に就任いただきました。

（和久田委員挨拶）

また、本日は音楽専門部会の梅田部会長にも臨席いただいております。後ほど音楽専門部会のご報告をいただきます。

次に、会議資料について確認いたします。

（事務局から配付資料確認）

それでは、ここからの進行は根本会長にお願いいたします。

2 議事

（根本会長）

それでは報告事項から参ります。「ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会について」事務局から報告をお願いします。

(企画課宮木から資料 1「ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会について(報告)」の説明)

(根本会長)

マンハイムほどの分野ですか。

(事務局 宮木)

音楽分野です。

(楢森委員)

浜松市について、会場から質問や意見はありましたか。

(事務局 宮木)

分野別会議では申請書の要約を持参したので、こちらから浜松市について説明しました。

(根本会長)

「音楽の経済的社会的効果について研究されているか」については、文芸大として大学を挙げて協力したいと思います。

(根本会長)

ユネスコのネットワークに加盟がかなうと、音楽分野ではアジアで初めてです。ヨーロッパの音楽ばかりを考えると「音楽の都」はウィーンだろうということになるが、かつてアジアで初めて東京でオリンピックをやった後にアジア・アフリカ諸国の IOC 加盟がどんと増えたということがあります。ボローニャでは 2000 年に欧州文化首都「ボローニャ 2000」を開催し、文化を柱にした地域活性化をしました。今回浜松が手を挙げるに当たっては、欧州とかアジアとか狭いことを言わずに「世界の音楽の都」「世界音楽文化首都」くらいに言ってもいい。「アジアで初めて」という点が色濃く出てもいいのではないかと思います。

また、浜松には食べ物や宿泊施設などいろいろな地域資源があるので、文化的多様性に関する国際会議が地域の産業の裾野に波及効果があるといいと思いました。「分科会・パネルディスカッション」のテーマに「楽器」「民族音楽」「音楽産業」などありますが、電子楽器は楽器だけではなくいろいろなデバイスやセンサーなど産業の裾野があって、この点で浜松は強い。この辺りの産業の裾野をもっと広げられるかなと思いました。

民族音楽の祭典では、大風呂敷を広げて「世界の音楽文化の首都である」といってしまってもいいのではないのでしょうか。「音楽の祭典 in 浜松」に外からモノを持ってきて入れるという提案は充実しているが、浜松から外へ発信する視点もあっていいのではないのでしょうか。「いろんなものを浜松に持ってきました」ではなく、浜松発、浜松スタンダードが世界に広がっていく産業、文化があるといいと思いました。

(そのほか特段の質問がなかったため、報告を終了した)

(根本会長)

次に、報告審議事項「音楽専門部会の活動について」、梅田部会長から報告をお願いします。

(音楽専門部会梅田部会長から資料 2「【音楽専門部会】音楽を産じた文化的多様性に関する国際会議について(報告)」及び資料 3「【音楽専門部会】世界(民族)音楽の祭典 in 浜松について(報告)」に基づき報告)

(松森委員)

私は、浜松は「楽器の都」でいいと思っているんです。浜松の楽器産業なくして、世界の音楽は成り立たないのです。楽器の発達は音楽の発達を生み出し、音楽の発達は楽器の発達を生み出すというスパイラルな関係にあります。音楽と楽器という、切っても切れない関係の中で、重要な部分を担っているのが浜松のまちです。「楽器のまちから音楽のまちへ」という言い方が以前されましたが、楽器は音楽そのものなのだからということもっと理解されたほうがいいのではないのでしょうか。浜松であれば、楽器をもっと前面に出したほうがいいと思います。

2点目に「世界音楽」ということは実に重要です。楽器産業はほとんどエレクトロニクス産業になりつつありますが、一番大事なことは音作りなんですね。多様な音階と旋律にいかにか触れるか、それをいかに電子的に取り入れていくか、新たな開発が行われていくものなのです。西洋音楽やポピュラー音楽に触れているだけでは、新しい楽器の開発はできません。浜松の楽器産業の発達にとっても、世界の多様な音楽があることを認識することは重要なのです。

民族音楽はその場所とどまっている音楽ではなく、その場所でどんどん発達している音楽です。交流の影響によりいろいろと変わっていきます。そんな世界的な音楽の発達を視野に入れておかないと民族音楽を理解できないし、それを理解することで音楽産業も発達していきます。民族音楽の「今」を知ることは大事なことだと思います。

3点目に、ユネスコ創造都市にしても、世界的に芸術文化でまちづくり、まちおこしをしている都市にとっても、実利は大切です。芸術文化はイメージがいいと思っているかもしれないが、世界の都市はもっとしたたかで、それによっていくら儲かるんだという話に必ずなります。ナントもグラスゴーも、重厚長大産業が寂れてまちが空洞化しているところでやっているからです。まだ浜松は危機感がないが、実利を求める姿勢は大切です。この国際会議にいらっしゃる都市の皆さんにとってもここに来ることによる実利は何か、我々はどういうものを還元できるかもう少し考える必要があります。

(和久田委員)

「世界(民族)音楽の祭典」の表記について括弧のあるものとないものがありますが、部会の委員により中身の理解がそれぞれ違うためでしょうか。コンセプトが固まった時点で、表記は同じにするとよいと思います。

今「楽器のまち」のお話があり、私はそれに賛成です。ただ、先日ヤマハとカワイのピアノを買ってアクトシティに入れたのですが、購入のための審査に行った場所は、カワイは電洋であり、ヤマハは掛川です。実は浜松では作ってないんですね。「楽器のまち」でありつづけることができるか心配なところでもあります。「楽器のまち」だけで押し通して

いけるのか不安はあります。

(根本会長)

「世界(民族)音楽の祭典」に括弧がついたりつかなかったりという点については、専門部会で議論はありましたか。

(梅田部会長)

ユネスコの創造都市ネットワークの加盟申請書に「世界民族音楽の祭典」と書いてあります。しかし、「民族音楽」は比較的差別をした言葉です。英語だと「エスニック・ミュージック」となり、「民族」という言葉で西洋音楽やポピュラー音楽などいろんなものを排除します。今は趨勢として、あるいは日本の学習指導要領、教科書でも「世界音楽」という言葉を使って世界中のあらゆる音楽を平等に扱おうとしていますので、「世界音楽」としてくださいということを部会長としてお話しをしました。ただ、申請書には「民族」という言葉が書いてありますので、市の職員がこのようにまとめていると思いますが、最終的にはひとつの表現にまとまっていかななくてはならないと思っています。

(根本会長)

申請書に書いたことを一言一句変えてはいけないということではないですよ。また検討していただければと思います。

(桧森委員)

英語で言えば「ワールド・ミュージック」というしかないですよ。

(根本会長)

部会長さんからお話を伺ったのは今日が初めてです。委員の皆さんは後でご提案などがあれば事務局にお伝えください。

(そのほか特段の意見がなかったため、報告審議を終了した)

(根本会長)

それでは、審議事項として「アクションプログラム(案)」について、事務局から説明をお願いします。

(事務局宮木から資料4『『創造都市・浜松』推進のための基本方針アクションプログラム(案)』及び資料5「創造都市事業一覧(案)」の説明)

(根本会長)

主要な論点は「課題の設定とそれに対応するコア事業の案が妥当であるかどうか」と、「指標について」です。いかがでしょうか。

(桧森委員)

冒頭事務局から説明がありましたが、調査に際し、提出をした、あるいは提出をしようとしていた事業で、まだ載っていないものもあります。6ページにはJAとびあ様との連携

ということしか載っておりませんが、創業支援や六次産業化が「魅力ある地域資源の活用」や『浜松のものづくり』を原点とした創造産業の創出」といったジャンルに入ってくるかと思えます。改めて事務局と調整します。

モニタリングに関して、全国には商工会議所が 514 ありますが、多種多様な産業を持っている京都の商工会議所さんは、中小企業が多いところでもあるが、付加価値額をベースにしたモニタリングをしているという情報があります。「知恵産業のまち京都」として 2007 年から推進されているということですので、私どもで調査をしまして、発表できるものであれば報告させていただきます。

(海野監事)

5本の柱について、他角度からいろいろなものが入っている印象は受けます。内容について異論はないが、肝心なのはそれぞれが個別に開催されるのではなく横串がしっかり通っていることです。最後の柱の「連携」は地域との連携などの意味でしょうか、5本の柱がすべてつながっている状態が実現できるといいなと思っています。

(根本会長)

きれいに整理分類してプレゼンテーションすることも大事だが、それをやりすぎて縦割りにならないようにということですね。

(川嶋監事)

先ほど検森委員からありましたように、どのくらいの実利があるかということが大事だと思います。資料 1 のコネスコ創造都市ネットワークの年次総会の中でも、音楽の経済的社会的効果についてという話がありました。平成 27 年度からの設定は難しいかもしれないが、モニタリングの指標として産業連関表の音楽イベントバージョンのようなものなのかどうか研究の余地があるが、期間の途中からでも模索していったらどうでしょうか。私は音楽を含めた文化・スポーツの担当部長であります。確かに儲けのネタ、活性化に財産として活かせるということが感覚としてあります。文芸大にも協力いただきながらモニタリングできるといいなと感じました。

(検森委員)

先ほど京都の付加価値額の話が出ましたが、浜松として独自に「浜松の創造産業」というものを設定して、その付加価値額がどうなるかということについてモニタリングされたいのかなと思います。付加価値額は「売値－原材料費」です。たとえば工業都市で加工産業が盛んなところでも下請けばかりのところは付加価値が低いです。加工賃にしか付加価値がないので。浜松は原材料と売値の間がものすごくあるというものを目指さなくてははいけません。それがどう推移していくのかを見ておく必要がある。先ほど和久田委員から企業に逃げられないようにしなくてはいけないという話がありましたが、今のところ各楽器メーカーさんも付加価値を作りこむ部分については浜松に置いています。デザインと研究開発の部門ですね。柱の中の『浜松のものづくり』を原点とした創造産業の創出」はすごく大事であるが、それと並行して既存産業における付加価値の拠点を強化するという視点が必要です。そのために何をすることも考えておく必要があるのではないのでしょうか。

(根本会長)

ユネスコでは8年おきにチェックが入り、パフォーマンスがあがっていないとネットワークからこぼれてしまいます。ユネスコ側が評価する内容があるはずですが、それに合わせるというだけではないが、どうせ評価するならユネスコのチェック項目も念頭に置いた項目を考えるのがいいかなと思いました。

それから、檢森委員もおっしゃっていたが、安く作ることだけ考えるならシステムが成熟したものは南アジアや東南アジアに事業所がどんどん移転しています。その中で付加価値の高いR&Dについてのとても大事な指摘で、私も大いに共感します。

(川嶋委員)

指標のところで「観光交流客数」と「外国人宿泊客数」と分けていますが、私の知識では外国では観光といえば宿泊がメインの指標です。日帰りの人とは単価が圧倒的に違うわけで宿泊か否かというように分けているのです。「外国人宿泊客数」のところは「宿泊客数」として、その中の外国人客数を内書きとして捉えるべきです。「観光交流客数」とすると宿泊が減って日帰りが増えた場合に指標は高まりますが、単価は圧倒的に違います。指標とするなら「宿泊」と「それ以外」としないとうまく管理できないと思います。ここは切り分けを変えたほうがいいです。

(根本委員)

以前調べたことがあります。静岡市と浜松市を比べると、浜松市は圧倒的に宿泊が強いです。企業の出張などもすべてカウントされていますから、裾野が広いのだろうと思います。川嶋委員のおっしゃるように分けたいと思います。

(和久田委員)

コア事業に「アクトシティ浜松管理運営事業」とありますが、ただ管理運営しているだけのようで、運営している側には違和感があります。もうちょっといい表現がないかなと思います。

ユネスコのネットワークへは音楽分野で手を挙げているので音楽を「てこ」にするのだろうとは思いますが、創造都市をもっと幅広いものとして捉えようとここではしているわけですね。その辺りを市民の皆さんに説明するときに、音楽が前面に出すぎるとほかのものはどうなんだろうと思われる。音楽専門部会が先行して立ち上がっており、ほかの専門部会が今後必要なんだろうなどは想像されますが、その辺りを市民の皆さんに分かっていただかないといけません。

(寺田副会長)

モニタリングについて、ほかの計画などは目標設定を活かしながら次の事業展開に利用していきます。今挙げているモニタリングの指標ですと、全般的で、総合力の結果のような感じがします。個別の具体的な事業が今のままでいいのかというチェックをするような事業指標が必要かだと思います。そのような趣旨からも委員の皆様にも目標、成果指標を検討いただけるとありがたく思います。

(根本会長)

評価には「間接」と「直接」があります。プロジェクト単位で直接として入込客が増えたとかお芝居の数をたくさん見たとかのほかに、間接として地域経済がどのくらい元気になったのか、両方があります。アウトプットとしての指標とアウトカムとしての地域がどれくらい活性化したのかということがまぜこぜにならないように詰めていければと思います。

それを研究するために文芸大も使っていただき、コアではないがいくつかの事業の中にその研究自体も入れられるかもしれません。浜松スタンダードとして、文化の評価はこうやるんだと発信できたらいいなと思いました。

和久田委員の意見については、音楽は柱なのですが、創造都市の大きな枠組の中での音楽としてやっております。クリエイティブな産業や人材がいかに地域を元気にしていくかという辺りを上手に広報したり、部会も将来考えたりする必要があると思いつながりながら伺いました。

(松森委員)

今のモニタリング指標には、アウトカムの指標とアウトプットの指標が混在しています。アウトプットの指標については施策との間の因果関係が必要で、この施策をやったからこの数字が変わったと言えないとまずいわけです。だからと言ってもっと狭い指標にしようというのは反対で、あくまでもアウトプットなんだけれども大きな指標がいいです。複数の政策を組み合わせで「観光入込数」など大きな指標を達成していくといった視点が必要になるわけです。どのアウトプット指標にどの施策が効くのかという分析が必要になります。

(そのほか特段の質問・意見がなかったため、審議を終了した)

3 閉会

(根本会長)

さらに意見のある方は、事務局にお寄せいただきたいと思います。

本日の案件は以上でございます。それでは、浜松市創造都市推進会議の第3回会議をこれで終了いたします。